

「気になるやつら」

—初稿—

2023/05/31

川尻 佳司

〈人物表〉

川原 ゆの (17) 高校3年生

田中 数馬 (17) 高校3年生

小幡 真凜 (17) 高校3年生

〈ログライン〉

「ゆのが数馬と恋愛する」

〈ねらい〉

ゆのが数馬との出会いによって自分を信じる

ホームルーム。

先生からプリントが配られる。

川原ゆの(17)、後ろの席の小幡真凛(17)に
プリントを渡して、

ゆの 「真凛、このプレスレット全然効果が無いんだが」

真凛 「ゆの、諦めな、うちらにはもう受験しかないんよ」

ゆの 「ねえ、このまま恋愛なしに、高校生活終わっていいわけ？」

真凛 「そんなもんじゃないのー、キャンパスライフに期待しよ」

ゆの 「真凛はいいよ、頭いいんだから、私は無理、将来やりた
いことだっつてないし」

と、誰かの視線に気づく。

田中数馬(17)、ゆのを見つめている。

真凛 「ゆの」

先生 「川原、今度は進路しっかり考えて、書いてきてくれよ、
最後だからな」

× × ×

ゆの 「駅前に新しくカフェできたんよ、今日行ってみよ」

真凛 「いいね、行こ、ただ今日はごめん、塾の補習なのよ」

ゆの 「え、補習？ 真凛に補習なんて必要ないよー」

真凛 「うーん、ちょっとね、狙ってるんだ」

ゆの 「早稲田？」

真凛 「お父さんがうるさくて」

ゆの 「そっか、うらやましいなー、真凛は期待されてんだよ、
うちなんか私に全然興味ないかんね」

真凛 「ごめんね、明日行こ」

ゆの、ふと数馬の視線に気づく。

数馬、視線をそらす。

真凛 「ゆの？ ごめん、やっぱ今日行こっか、補習なんて今度
に」

ゆの 「ああ、ちがうちがう、だいじょぶ」

2. 下駄箱(夕)

生徒たち、帰る。

ゆの、帰りがけ、数馬の視線に気づく。
動揺を隠すように、何食わぬ顔で帰る。

3. 教室(昼)

授業中。

ゆの、腕のブレスレットを見つめる。

数馬の席を見る。

数馬もゆのを見ている。

ゆの、すぐに向き直る。

4. 校庭(昼)

サッカーの授業。

数馬たち男子、サッカーする。

ゆの、数馬を目で追って、

ゆの 「田中君、どう思う?」

真凜 「え、田中君? うーん、なんだろ、可もなく不可もなく、
普通かな」

ゆの 「普通、そう、私も普通だと思ってきたのよ」

真凜 「ああ、2年の文化祭の時、ゆの、田中君とお化け屋敷の
お化け役ペアでやってたよね」

ゆの 「うん、田中君がお客さん、全然怖がらせられないから、
喝入れてやったのよね」

真凜 「え、喝」

ゆの 「やっぱ、あの時か、あれから、長い時間胸を痛ませてし
まったみたい、私も罪な女だわ」

5. 教室(昼)

休み時間。

数馬とゆの。

数馬 「川原」

ゆの 「え、え、ちょ、ちょ、ちょっと待って、なにになに?」

数馬 「悪いんだけど、ちょっと話したいことがあるんだ、今日、終わったら体育館裏に来て欲しいんだけど」

6. 体育館裏(昼)

人気のない体育館裏。

数馬とゆの。

数馬 「川原、俺が見てたの気づいてただろ」

ゆの 「ああ、うん、なんか私に言いたいことあるの?」

数馬 「変に思わせてごめんな」

ゆの 「ああ、別にそんなことないけど」

数馬 「なかなか、言い出せなくて、その」

ゆの、固唾をのむ。

数馬 「そのブレスレットどこで手に入れたんだ?」

ゆの 「(大きめの)は?」

数馬 「他の人間に聞かれるとめんどいから、お前、あるんだろ、
霊感」

ゆの、一瞬固まる。

ゆの 「あー、田中君もあるんだ」

かずま、足首の水晶のアンクレットを見せる。

ゆの 「おお、これは死にかけてるね」

数馬 「やっぱり、わかるんだな、たのむ教えてくれ」

7. 天然石専門店(昼)

数馬、水晶を手にとって。

ゆの 「どう?」

数馬 「ああ、これ熱いな」

ゆの、店員に、

ゆの 「すみません、これをお願いします」

8. 街中(昼)

数馬 「助かったよ、ここんところすげえ体調良くなって」

ゆの 「田中君、霊感あるんだって知らなかった、ほら、お化け屋敷やった時も、そういうの全然疎そうだったから」

数馬 「そういうの周りに知られるとめんどいからさ、極力隠し

てんだ、だけど、川原がそのブレスレットしてんの見て、ああ仲間だって、いつも行ってた店が急になくなってき、本物扱ってるところって中々ないんだよな」

ゆの 「本物か、結局効果無かったんだなあ」

数馬 「なんの効果だ？」

ゆの 「いや別に」

数馬 「なあ、川原、その、これからもこういうことで相談相手になつてくんないか、たのむよ、俺今までこういうこと話せる仲間がいなかったんだ」

ゆの 「いいよ、私も別にそんなに詳しいわけじゃないけど」

数馬 「やったあ、ありがとな」

9. 教室（昼）

数馬と真凛。

ゆのの席。

数馬 「川原が登校拒否？」

真凛 「いや、そんな大ごとじゃなくて、ちょっと、進路で悩んでてね」

10. 神社境内（昼）

ゆの、神木の傍に立っている。

数馬、来る。

数馬 「よっ」

ゆの 「田中君」

数馬 「俺の霊感は冴えてるなあ」

ゆの 「こわーい」

数馬 「進路で悩んでんのか」

ゆの 「私、これといって何もないからさ、やりたいこともないし」

数馬 「あの文化祭で俺になんて言ったか覚えてるか」

ゆの 「あ、まだ恨んでんの」

数馬 「ちげーよ、感謝してんだ、みんなでなんとなく始めたお化け屋敷だったけど、なあなあで流さないで、川原は真剣にやるために怒ってくれたよな」

ゆの 「私はただ、たった一度の高校生活楽しみたかっただけだよ」

数馬 「俺、他の事は忘れちゃっても、あのお化け屋敷やったことは多分ずっと覚えてると思う、この先思い出してまた元氣出すと思うんだ」

ゆの 「田中君」

11. 教室(朝)

ゆの、教室に入って来る。

真凜 「ゆの」

ゆの 「ごめん、心配させて」

先生 「川原、来たな」

ゆの 「先生、ごめんなさい、私書いてきました」と、先生に進路を書いた紙を渡す。

紙には大学文学部、芸術学部の文字。

12. 校庭(昼)

サッカーの授業。

ゆの、数馬のアンクレットが落ちてるのを発見する。

拾い上げて、サッカーする数馬に向かって、

ゆの 「田中君、これ、ったく、これでも靈感があるのかね」

男子 「靈感？ あーやっぱり川原だったんだ」

ゆの 「えっ、ごめん忘れてね」

男子 「あいつにどんなこと言われたんだ、田中には靈感なんてないぞ」

ゆの 「え？」

男子 「あいつにアンクレット頼まれて貸したの俺なんだよ」

ゆの 「どういうこと？」

男子 「そういうことだろ」

ゆの、サッカーする数馬を見つめる。